



トラフグ (伊勢・三河湾系群) ①

トラフグは主に日本沿岸、東シナ海、黄海に分布し、このうち本系群は伊勢・三河湾を中心に分布する群である。本系群の漁獲量や資源量は漁期年（4月～翌年3月）の数値を示す。本海域では人工種苗放流が1980年代から実施されている。

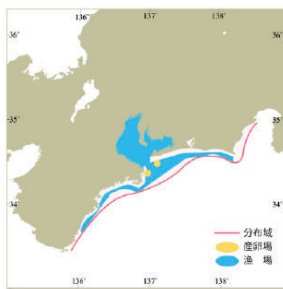


図1 分布域

紀伊半島東岸から駿河湾沿岸を主な分布域としており、春に伊勢湾口で産まれた仔魚は伊勢湾内および三河湾内に輸送され、成長に伴い湾外へ分布を拡大する。

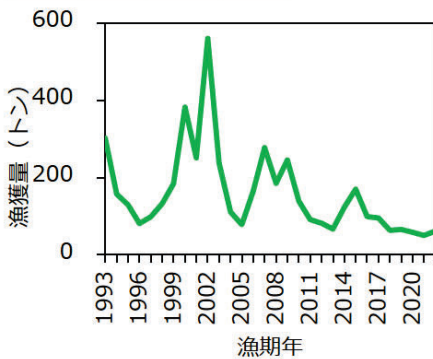


図2 漁獲量の推移

漁獲量は1993年漁期は302トンであったが、2002年漁期は560トンに増加し、2006～2009年漁期は200トン前後で推移した。2010年漁期以降は200トン以下の漁獲量が続く、2022年漁期の漁獲量は62トンであった。

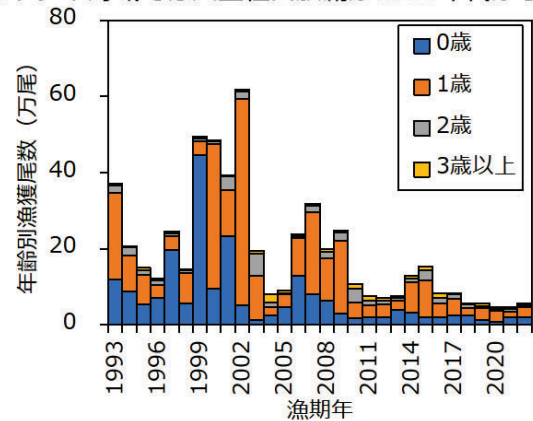


図3 年齢別漁獲尾数の推移

漁獲尾数は、0歳魚および1歳魚が全体の7～9割を占める。2001年漁期以前では0歳魚が6割以上を占めていた年もあったが、資源回復計画が開始された2002年漁期以降は0歳魚の漁獲が減少し、1歳魚の漁獲が中心となった。

本資料では、管理基準値や漁獲管理規則など、資源管理方針に関する検討会（ステークホルダー会合）の議論をふまえて最終化される項目については、研究機関会議において提案された値を暫定的に示した。

1

トラフグ (伊勢・三河湾系群) ②

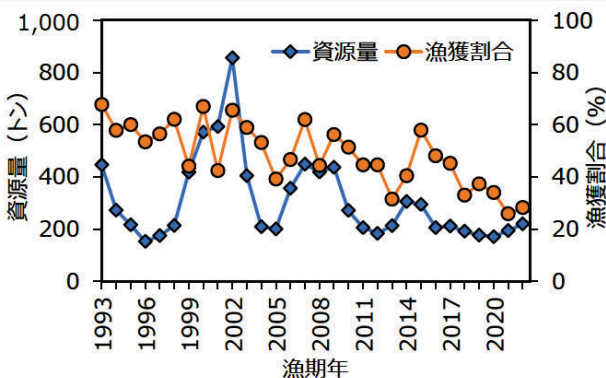


図4 資源量と漁獲割合の推移

資源量は、2002年漁期に856トンとピークに達したが、2004年漁期以降は2006～2009年漁期（355～448トン）を除き、171～305トンの範囲で推移している。2022年漁期の資源量は220トンであった。漁獲割合は1993～2007年漁期は39～68%の間を変動し、2008年漁期以降は変動しながらも減少傾向にある。2018年漁期以降は40%以下に抑制され、2022年漁期は28%であった。

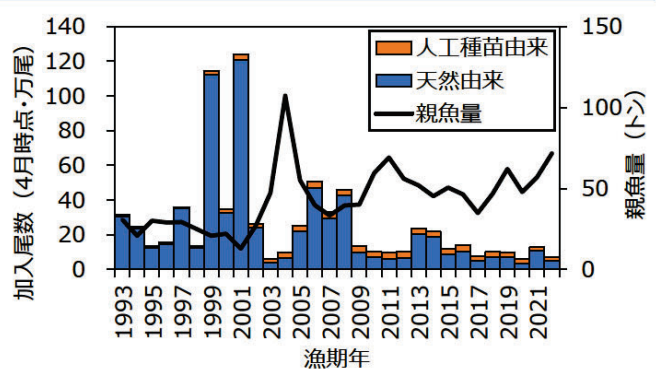


図5 加入量と親魚量の推移

加入量（0歳魚の資源尾数）は、1999年漁期の114万尾、2001年漁期の124万尾以降は減少傾向を示し、2003年漁期には5.9万尾となった。2006年漁期の50.8万尾まで増加した後再び減少し、2022年漁期は7.4万尾であった。このうち人工種苗由来の加入尾数は0.8万（1994年漁期）～4.1万尾（2006年漁期）の範囲で推移し、2022年漁期は2.4万尾であった。親魚量は2004年漁期の107トンとピークに以降は60トン前後で推移していたが、2022年漁期の親魚量は72トンと推定された。

本資料では、管理基準値や漁獲管理規則など、資源管理方針に関する検討会（ステークホルダー会合）の議論をふまえて最終化される項目については、研究機関会議において提案された値を暫定的に示した。

2

トラフグ (伊勢・三河湾系群) ③

本系群では、生物学的管理基準値をもとにMSY管理基準値に相当する代替値を提案する1Bルールを適用する。1Bルールにおいては、MSYは、今後の加入状況を代表すると考えられる加入量(図6)のもとで、Fmsyの代替値として提案する漁獲圧の強さ(Fxx%SPR、図7)で漁獲を続けた場合に期待される漁獲量であり、そのときの親魚量がSBmsyの代替値となる。

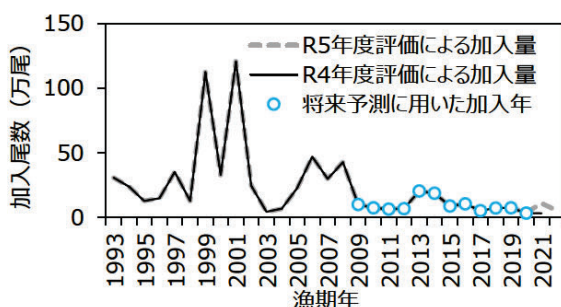


図6 1Bルールに用いる天然由来加入量時系列

本系群では、信頼できる再生産関係の推定が困難であった。そのため、過去の加入のうち、近年の低迷した加入動態を表現する2009～2020年漁期(青丸)と同水準の加入が今後も起こると仮定して、将来予測を行った。なお、将来予測に用いた2009～2020年漁期の加入量は令和4(2022)年度資源評価時点での推定値である(黒線)。

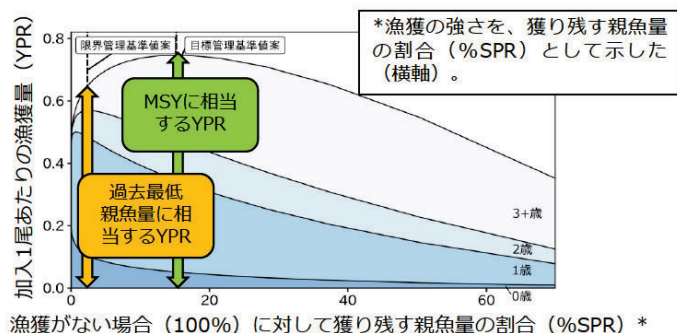


図7 漁獲圧(%SPR)と加入1尾あたりの相対漁獲量(YPR)の関係

最大持続生産量(MSY)を実現する漁獲圧(Fmsy)としてF15%SPRを提案する。この値は加入1尾あたりの漁獲量が最大になる漁獲圧(Fmax)に相当する。この漁獲圧で将来予測した時に推定される平均親魚量(SBmsy=84トン)を目標管理基準値、過去最低親魚量を限界管理基準値、0トンを禁漁水準として提案する。

目標管理基準値案	限界管理基準値案	禁漁水準案	2022年漁期の親魚量	MSY	2022年漁期の漁獲量
84トン	13トン	0トン	72トン	60トン	62トン

本資料では、管理基準値や漁獲管理規則など、資源管理方針に関する検討会(ステークホルダー会合)の議論をふまえて最終化される項目については、研究機関会議において提案された値を暫定的に示した。

3

トラフグ (伊勢・三河湾系群) ④

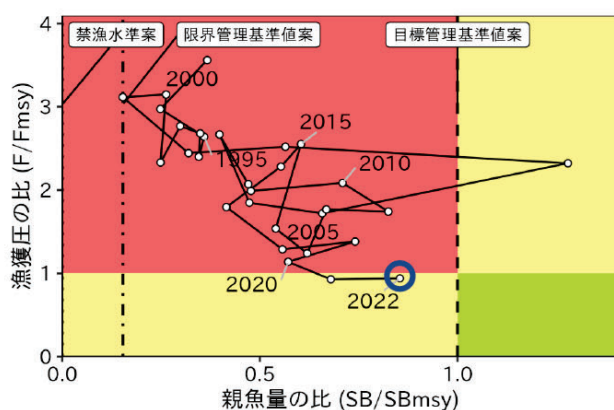


図8 神戸プロット(神戸チャート)

漁獲圧(F)は、2015年漁期以降減少傾向にあり、2022年漁期はFmsyを下回っている。親魚量(SB)は2004年漁期を除き、Fmsyで漁獲を続けた場合の平衡状態における親魚量(SBmsy)を下回っている。

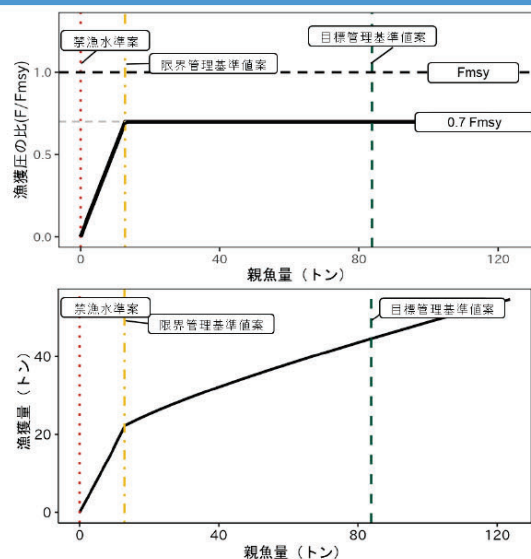


図9 漁獲管理規則案(上図：縦軸は漁獲圧、下図：縦軸は漁獲量)

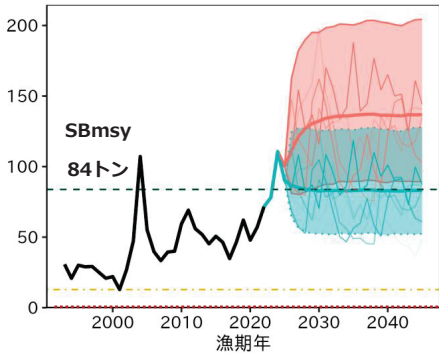
Fmsyに乘じる調整係数である β を0.7とした場合の漁獲管理規則案を黒い太線で示す。下図の漁獲量については、平均的な年齢組成の場合の漁獲量を示した。

本資料では、管理基準値や漁獲管理規則など、資源管理方針に関する検討会(ステークホルダー会合)の議論をふまえて最終化される項目については、研究機関会議において提案された値を暫定的に示した。

4

トラフグ（伊勢・三河湾系群）⑤

将来の親魚量（トン）



将来の漁獲量（トン）

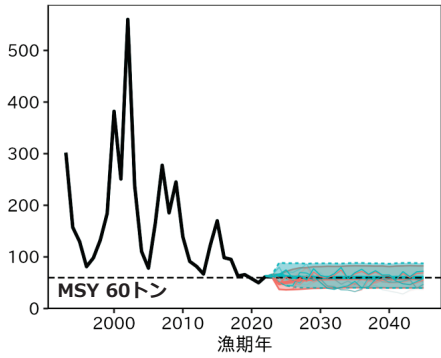


図10 漁獲管理規則案の下での親魚量と漁獲量の将来予測（現状の漁獲圧は参考）

βを0.7、将来の加入量（0歳魚の資源尾数）として令和4（2022）年度資源評価における2009～2020年漁期の天然由来の加入量水準を仮定した場合の漁獲管理規則案に基づく将来予測結果を示す。

0.7Fmsyでの漁獲を継続した場合、平均値としては、親魚量は目標管理基準値案を上回る水準で推移し、漁獲量は一旦減少し、その後はMSYと同程度の水準で推移する。

漁獲管理規則案に基づく将来予測（β=0.7の場合）

現状の漁獲圧に基づく将来予測

実線は予測結果の平均値を、網掛けは予測結果（1万回のシミュレーションを試行）の90%が含まれる範囲を示す。

----- MSY

----- 目標管理基準値案

----- 限界管理基準値案

..... 禁漁水準案

本資料では、管理基準値や漁獲管理規則など、資源管理方針に関する検討会（ステークホルダー会合）の議論をふまえて最終化される項目については、研究機関会議において提案された値を暫定的に示した。

トラフグ（伊勢・三河湾系群）⑥

表1. 将来の平均親魚量（トン）

2034年漁期に親魚量が目標管理基準値案（84トン）を上回る確率															
β	現状の漁獲圧との比	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	
1.0	1.0	72	78	111	90	87	85	84	84	83	83	83	83	83	42%
0.9	0.9	72	78	111	93	94	96	96	97	97	97	98	98	98	66%
0.8	0.8	72	78	111	97	103	108	111	112	113	114	115	115	115	87%
0.7	0.7	72	78	111	100	111	121	127	131	132	134	135	136	136	97%
現状の漁獲圧	1.0	72	78	111	90	87	85	84	83	83	83	83	83	83	41%

表2. 将来の平均漁獲量（トン）

2024～2034年漁期の平均漁獲量の合計値（トン）															
β	現状の漁獲圧との比	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	
1.0	1.0	62	62	65	62	61	60	60	60	60	60	60	60	60	667
0.9	0.9	62	62	59	58	59	59	59	60	60	60	60	60	60	653
0.8	0.8	62	62	54	55	56	57	58	59	59	59	59	59	59	634
0.7	0.7	62	62	48	50	53	55	56	57	57	58	58	58	58	609
現状の漁獲圧	1.0	62	62	65	62	61	60	60	60	60	60	60	60	60	667

漁獲管理規則案に基づく将来予測において、将来の加入量に2009～2020年漁期の天然由来の加入量水準を仮定し、βを0.7～1.0の範囲で変更した場合と現状の漁獲圧（2020～2022年漁期の平均：β=1.00相当）の場合の平均親魚量と平均漁獲量の推移を示す。2023年漁期の漁獲量は、予測される資源量と現状の漁獲圧により仮定し、2024年漁期から漁獲管理規則案に基づく漁獲を開始する。

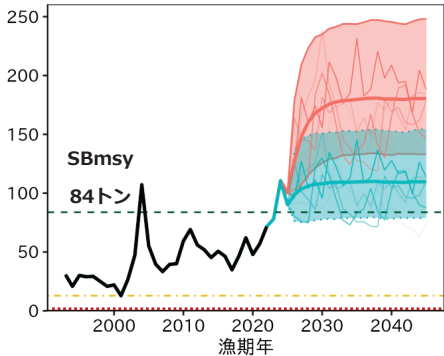
β=0.7とした場合、2024年漁期の平均漁獲量は48トン、2034年漁期に親魚量が目標管理基準値案を上回る確率は97%と予測される。なお、β=0.97以下であれば50%以上の確率で目標管理基準値案を上回ると予測された。

※ 表の値は今後の資源評価により更新される。

本資料では、管理基準値や漁獲管理規則など、資源管理方針に関する検討会（ステークホルダー会合）の議論をふまえて最終化される項目については、研究機関会議において提案された値を暫定的に示した。

トラフグ（伊勢・三河湾系群）⑦

将来の親魚量（トン）



将来の漁獲量（トン）

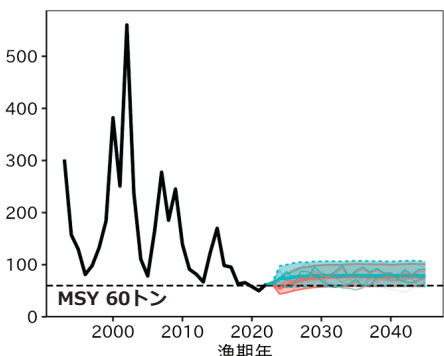


図11 種苗放流を想定した場合の漁獲管理規則案の下での親魚量と漁獲量の将来予測（現状の漁獲圧は参考）

βを0.7、人工種苗由来の加入を加算した場合の漁獲管理規則案に基づく将来予測結果を示す。人工種苗由来の加入尾数は2017～2021年漁期の放流実績の平均値（放流尾数52.4万尾）と平均添加効率0.05*の積とした。

0.7Fmsyでの漁獲を継続した場合、平均値としては、親魚量は目標管理基準値案を上回る水準で推移し、漁獲量はMSY水準を超えて推移する。

*添加効率は放流個体が資源に加入する比率。

本資料では、管理基準値や漁獲管理規則など、資源管理方針に関する検討会（ステークホルダー会合）の議論をふまえて最終化される項目については、研究機関会議において提案された値を暫定的に示した。

トラフグ（伊勢・三河湾系群）⑧

表3. 種苗放流を想定した場合の将来の平均親魚量（トン）

2034年漁期に親魚量が目標管理基準値案（84トン）を上回る確率															
β	現状の漁獲圧との比	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	
1.0	1.0	72	78	111	90	99	104	106	108	108	109	110	110	110	90%
0.9	0.9	72	78	111	93	108	117	122	125	126	128	128	129	129	99%
0.8	0.8	72	78	111	97	117	132	140	145	147	150	151	151	152	100%
0.7	0.7	72	78	111	100	128	148	160	168	172	176	177	179	179	100%
現状の漁獲圧	1.0	72	78	111	90	99	104	106	108	108	109	109	109	109	90%

表4. 種苗放流を想定した場合の将来の平均漁獲量（トン）

2024～2034年漁期の平均漁獲量の合計値（トン）															
β	現状の漁獲圧との比	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	
1.0	1.0	62	63	74	74	76	77	78	79	79	79	79	79	79	853
0.9	0.9	62	63	68	70	74	76	77	78	78	79	79	79	79	835
0.8	0.8	62	63	61	66	70	74	75	77	77	78	78	78	78	812
0.7	0.7	62	63	55	61	66	70	73	74	75	76	76	76	77	779
現状の漁獲圧	1.0	62	63	74	74	76	77	78	79	79	79	79	79	79	853

漁獲管理規則案に基づく将来予測において、人工種苗由来の加入を想定し、βを0.7～1.0の範囲で変更した場合と現状の漁獲圧（2020～2022年漁期の平均；β＝1.00相当）の場合の平均親魚量と平均漁獲量の推移を示す。2023年漁期の漁獲量は、予測される資源量と現状の漁獲圧により仮定し、2024年漁期から漁獲管理規則案に基づく漁獲を開始する。

β＝0.7とした場合、2024年漁期の平均漁獲量は55トン、2034年漁期に親魚量が目標管理基準値案を上回る確率は100%と予測される。なお、β＝1.15以下であれば50%以上の確率で目標管理基準値案を上回ると予測された。人工種苗由来の加入尾数は2017～2021年漁期の放流実績の平均値（放流尾数52.4万尾）と平均添加効率（0.05）の積（2.6万尾）とした。

※ 表の値は今後の資源評価により更新される。

本資料では、管理基準値や漁獲管理規則など、資源管理方針に関する検討会（ステークホルダー会合）の議論をふまえて最終化される項目については、研究機関会議において提案された値を暫定的に示した。

トラフグ（伊勢・三河湾系群）⑨

表5. 放流シナリオごとの将来予測結果					2034年漁期に親魚量が目標管理基準値案（84トン）を上回る確率			
将来の加入の 想定	β	現状の 漁獲圧 との比	予測平均親魚量（トン）		予測平均漁獲量（トン）			
			5年後	10年後	管理開始年	5年後	10年後	
			（2029年漁期）	（2034年漁期）	（2024年漁期）	（2029年漁期）	（2034年漁期）	
2009～2020 年漁期の 天然由来の 加入水準	1.0	1.0	84	83	65	60	60	42%
	0.9	0.9	97	98	59	60	60	66%
	0.8	0.8	112	115	54	59	59	87%
	0.7	0.7	131	136	48	57	58	97%
	現状の漁獲圧	1.0	83	83	65	60	60	41%
上記に種苗 放流を加算 （52.4万尾 放流、 添加効率 0.05）	1.0	1.0	108	110	74	79	79	90%
	0.9	0.9	125	129	68	78	79	99%
	0.8	0.8	145	152	61	77	78	100%
	0.7	0.7	168	179	55	74	77	100%
	現状の漁獲圧	1.0	108	109	74	79	79	90%

漁獲管理規則案に基づく将来予測において、将来の加入の想定ごとの概要について β を0.7～1.0の範囲で変更した場合と現状の漁獲圧（2020～2022年漁期の平均： $\beta=1.00$ 相当）の場合の平均親魚量と平均漁獲量を示す。2023年漁期の漁獲量は、予測される資源量と現状の漁獲圧により仮定し、2024年漁期から漁獲管理規則案に基づく漁獲を開始する。

$\beta=0.7$ とした場合、2034年漁期に親魚量が目標管理基準値案を上回る確率は、天然由来による加入のみの場合は97%、種苗放流を想定した場合は100%と予測される。なお、2034年漁期に親魚量が目標管理基準値案を50%以上の確率で上回ることが期待される β は、天然由来による加入のみの場合0.97、放流を考慮した場合は1.15と予測される。

※ 表の値は今後の資源評価により更新される。

本資料では、管理基準値や漁獲管理規則など、資源管理方針に関する検討会（ステークホルダー会合）の議論をふまえて最終化される項目については、研究機関会議において提案された値を暫定的に示した。



マアナゴ伊勢・三河湾 令和5年度資源評価結果

1

生物学的特性



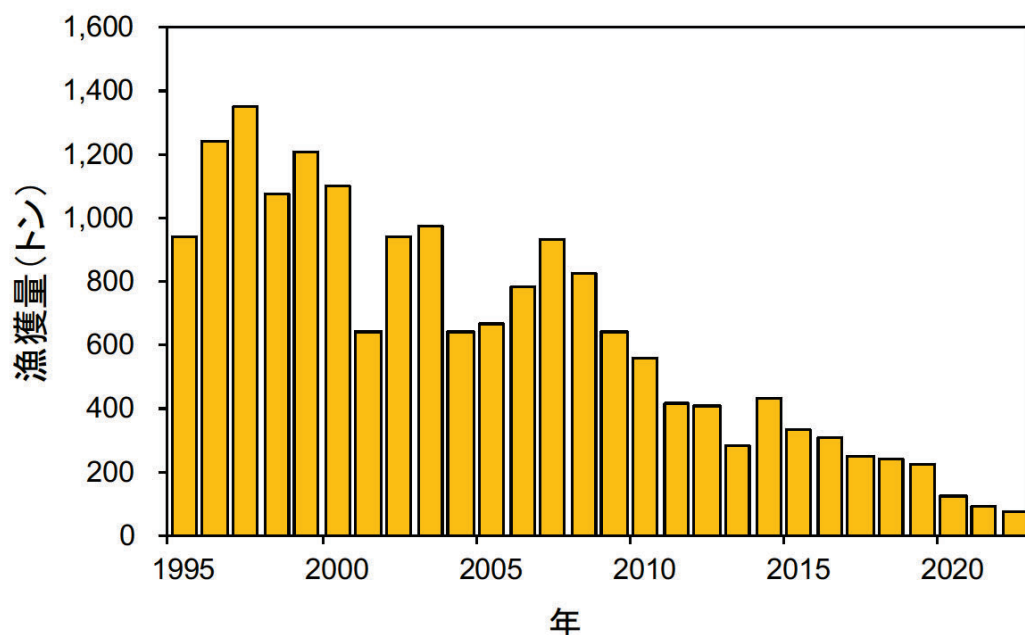
生物学的特性

- 寿命：4歳以上
- 成熟開始年齢：不明
- 産卵期・産卵場：
詳細は不明、産卵場は沖ノ島島南方の九州パラオ海嶺付近に唯一確認されている
- 食性：
稚魚は小型の底生生物、成長につれ多毛類、エビ類、魚類、軟体類
- 捕食者：不明

- 外洋の産卵場から仔魚が長距離回遊し来遊する
- 広域にわたる資源の一部

2

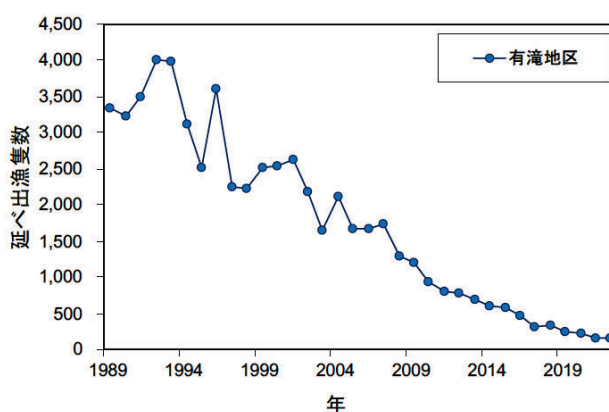
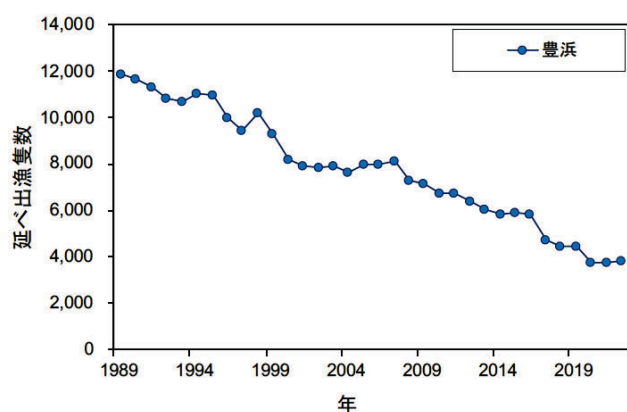
漁獲の動向①



- 伊勢・三河湾では、主に、小型機船底びき網漁業（小底）、かご漁業により漁獲される
- 2022年のマアナゴ漁獲量（伊勢・三河湾内）
愛知県：75トン 三重県：3トン 計：78トン

3

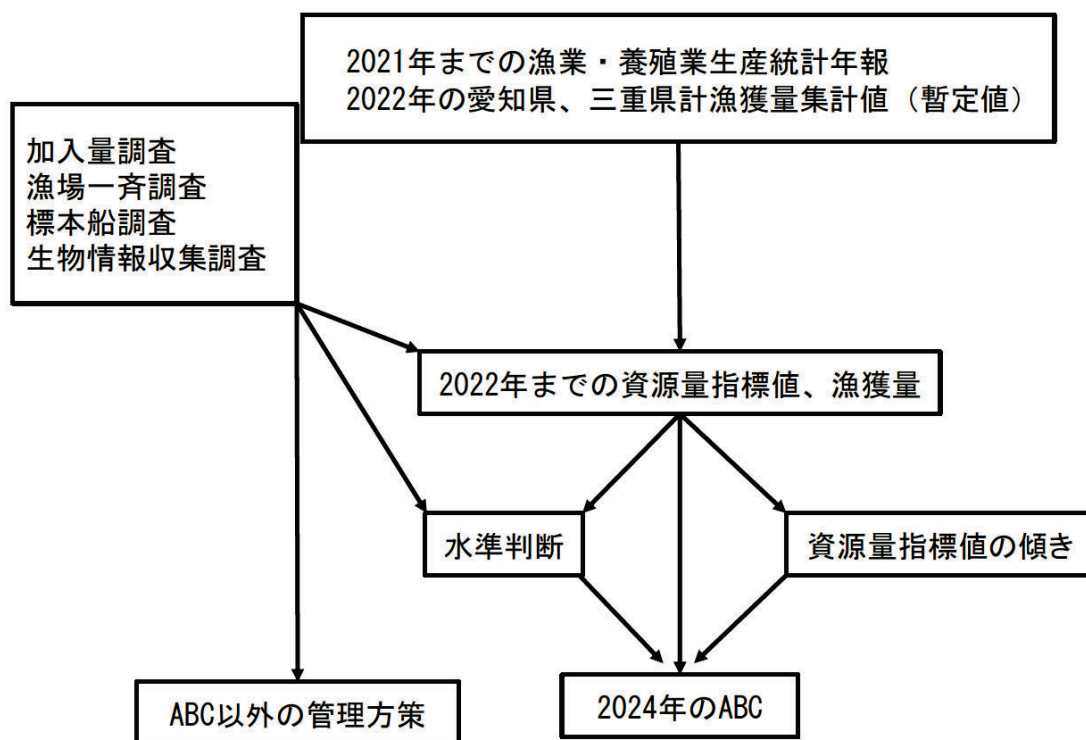
漁獲の動向②



- 漁獲努力量は減少傾向にある
- 2022年の小底標本漁港の漁獲努力量
愛知県豊浜：3,840隻・日 三重県有滝：171隻・日

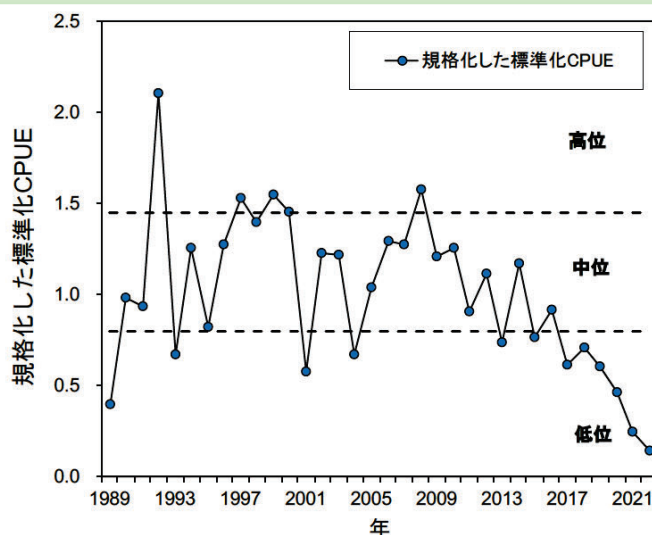
4

資源評価の流れ



5

資源の動向



※水準区分 低位／中位：標準化CPUE 0.79 中位／高位：標準化CPUE 1.45
(平均値が1となるよう規格化した標準化CPUEの値で水準判断)

- 愛知県・三重県主要港の小底の標準化CPUEから判断
- 資源水準：2022年の標準化CPUEは0.14であり「低位」
- 資源動向：直近5年間（2018～2022年）の標準化CPUEの推移から「減少」

※標準化CPUE：水揚げ港による操業の偏りを取り除いた単位努力量当たりの漁獲量⁶

資源評価のまとめ

- 伊勢・三河湾内のマアナゴ漁獲量は、2022年は78トン
- マアナゴ伊勢・三河湾の資源水準は「低位」、動向は「減少」

2024年ABC

管理基準	Target/Limit	2024年ABC (トン)	漁獲割合 (%)	F値（現状のF値 からの増減%）
0.7・Ct・0.44	Target	24	—	—
	Limit	29	—	—

- ABC算定規則の2-1)により、 $ABC_{limit} = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ で計算
- δ_1 : 0.7 (Caveを用いる場合の低位水準の推奨値)
- Ct: Cave 3-yr (直近3年間(2020~2022年)の平均漁獲量)
- γ_1 : 0.44 (直近3年間の資源量指標値の傾きと平均値から算出)



シャコ伊勢・三河湾系群 令和5年度資源評価結果

1

生物学的特性



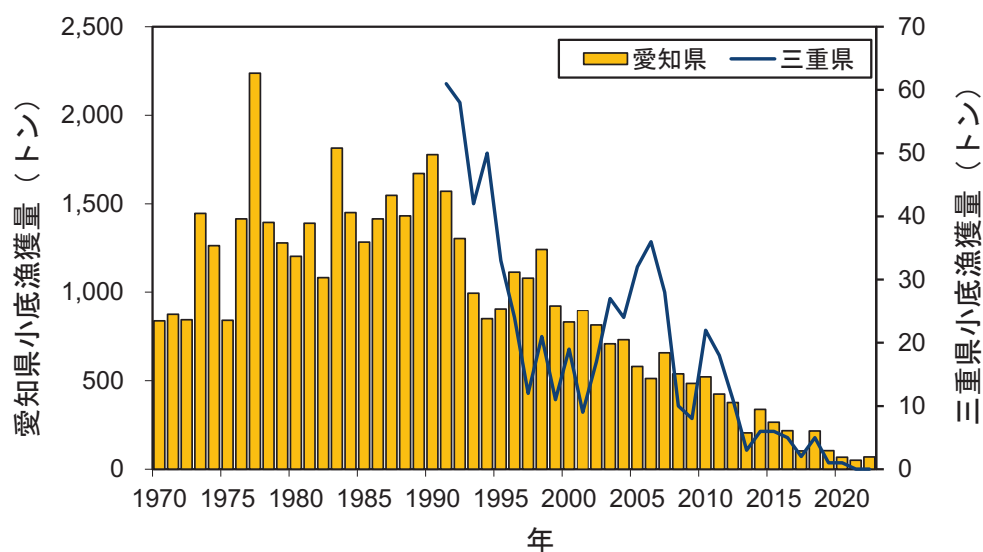
生物学的特性

- 寿命：4歳
- 成熟開始年齢：1歳（100%）
- 産卵期・産卵場：
5～9月（伊勢・三河湾内）
- 食性：
肉食（東京湾では体長に応じて
魚類、貝類、多毛類、甲殻類）
- 捕食者：マアナゴ、ハモ

- 主漁期は春から夏

2

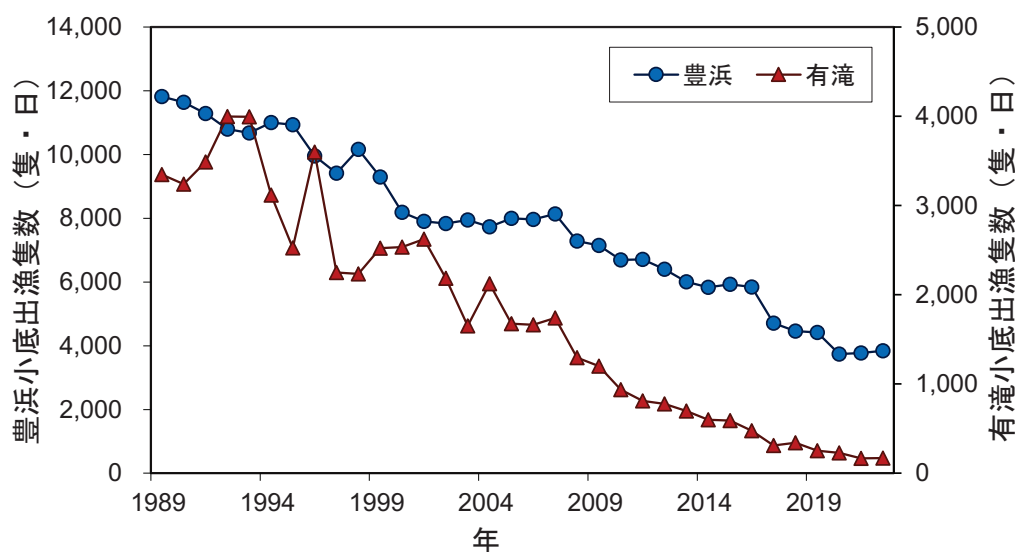
漁獲の動向①



- 小型機船底びき網（小底）による漁獲がほぼ100%を占める
- 2022年の漁獲量 愛知県：69トン（暫定値）
 三重県：0トン（0.5トン未満）
 計：69トン

3

漁獲の動向②

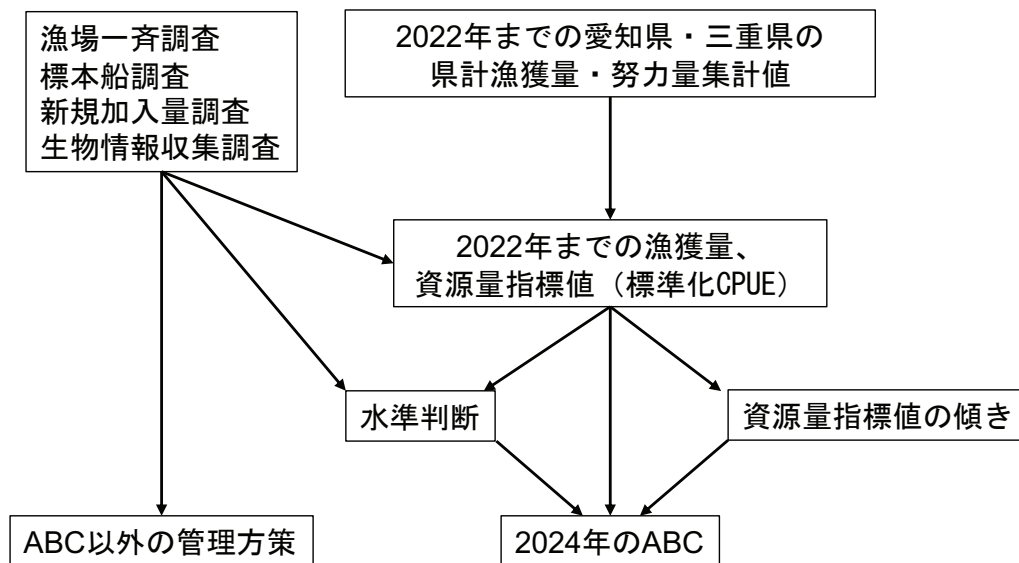


- 愛知県豊浜漁港と三重県有滝漁港の出漁隻数は1990年代以降減少傾向が続いている

※出漁隻数：小底漁船の総出漁隻数（隻・日）、有滝漁港は夜間操業のみ集計

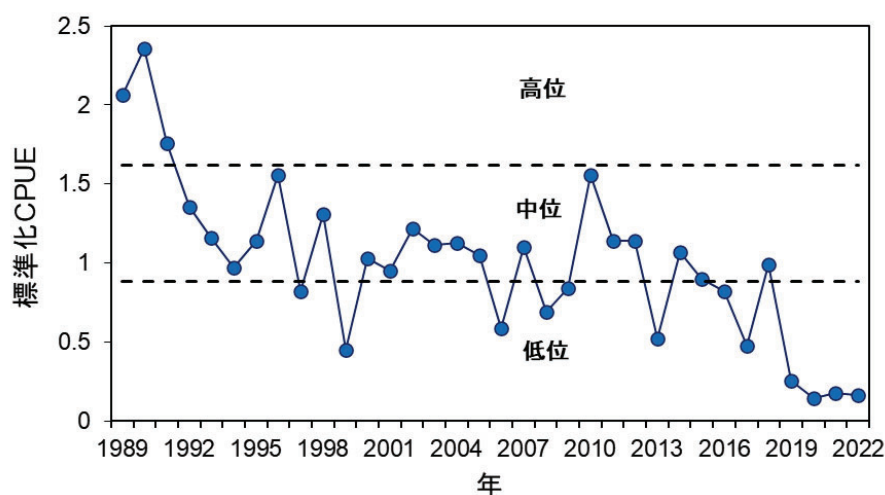
4

資源評価の流れ



5

資源の動向



※水準区分 低位／中位：標準化CPUE 0.88、中位／高位：標準化CPUE 1.62
(過去34年の最大値と最小値の間を3等分して算出)

- 愛知県・三重県主要港の小底の標準化CPUEから判断
- 資源水準：2022年の標準化CPUEは0.17であり「低位」
- 資源動向：直近5年間（2018～2022年）の標準化CPUEの推移から「減少」

※標準化CPUE：分布や操業による偏りを取り除いた、単位努力量あたり漁獲量

6

資源評価のまとめ

- 今年度より資源量指標値として標準化CPUEを導入
- 資源量指標値にもとづいて判断した2022年の資源水準は「低位」、動向は「減少」

2024年ABC

管理基準	Target/Limit	2024年ABC (トン)	漁獲割合 (%)	F値（現状のF値 からの増減%）
0.6・Cave 3-yr・ 0.50	Target	15	—	— (—)
	Limit	19	—	— (—)

- ABC算定規則の2-1) により、 $ABC_{limit} = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ で計算
- δ_1 : 0.6（資源水準に応じて調整する係数）
- Ct : Cave 3-yr（直近3年間（2020～2022年）の平均漁獲量）
- γ_1 : 0.50（資源量指標値の直近5年間（2018～2022年）の傾きと平均値から算出）

伊勢湾・三河湾小型機船底びき網漁業対象種の広域資源管理

1 資源の現状

伊勢湾、三河湾内の小型機船底びき網漁業全体（貝類除く）の漁獲量は、1970 年代には 1 万トン程度であったが、それ以降は減少傾向にあり、2010 年～2020 年は 2,000～3,000 トン程度で推移しており、2021 年は 1,950 トンであった。（図 1）。

小型機船底びき網漁業等の重要魚種であるトラフグ、マアナゴ、シャコは、小さなサイズで漁獲される割合が高いことから、小型魚の保護を中心とした管理で漁獲量の増大を図る必要がある。

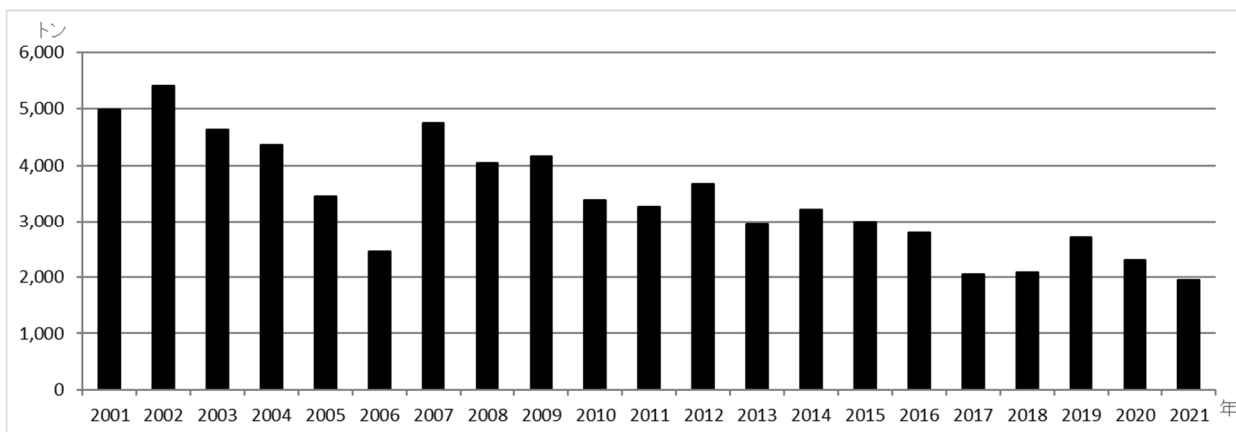


図 1 2001 年以降の伊勢湾・三河湾内の小型機船底びき網漁業全体（貝類除く）の漁獲量推移

2 関係漁業種類

県	漁業種類	
愛知県	小型機船底びき網	まめ板網、餌料びき網、えびけた網、貝けた網、外海底びき網
	その他の関係漁業	機船船びき網 あなご簗、ふぐはえ縄
三重県	小型機船底びき網	まめ板網
	その他の関係漁業	機船船びき網 あなご簗、ふぐはえ縄

3 資源管理の方向性

伊勢湾及び三河湾での小型機船底びき網漁業の漁獲量は、1990 年代に大きく減少し、同漁業にとって重要魚種であるトラフグ、マアナゴ、シャコの 3 種は、漁獲量に占める比率も減少している（図 2）。また、3 種を含む多くの魚種は、小さなサイズで漁獲される割合が高く、成長乱獲の防止が必要とされた。このため、伊勢湾、三河湾における底魚資源を対象とし、小型魚保護の強化、改良漁具の導入及び休漁日の設定等を内容とした資源管理に取り組むことで、対象資源の回復と漁獲量の増大を目指してきた。

その結果、トラフグでは 2002 年以降の小型機船底びき網漁業による漁獲量がそれまでと比較して 1/10 以下にまで大幅に抑制されたものの、依然として、他の漁業種類を含む現在の操業形態のもとでは未成魚のうちに多くが漁獲されており、これまでの取組を継続するとともに、未成魚の獲り控えをさらに徹底するなどの堅実な資源管理に取り組む必要があると考えられる。

なお、トラフグ伊勢・三河湾系群については、令和 4 年 12 月に M S Y ベースの資源評価が公表となり、令和 5 年 7 月に資源管理手法検討部会が開催され、T A C 管理に向けた課題の整理が行われたところであり、当該部会の整理を踏まえた上で、引き続き検討を行っていく。

また、マアナゴでは漁獲サイズの大型化、シャコでは努力量あたり漁獲量の増加傾向がみられたが、漁場環境の悪化も相まって資源の大きな回復には至っていないことから、これま

での取組を継続していくとともに、取組の強化等を進め、より効果の高い資源管理を実践していくことが適当と考えられる。

なお、トラフグは伊勢湾、三河湾の小型機船底びき網漁業の漁獲対象になっているほか、静岡県、愛知県、三重県のふぐはえ縄漁業等によっても漁獲される地域の重要資源であることから、より広域な取組が必要となっている。

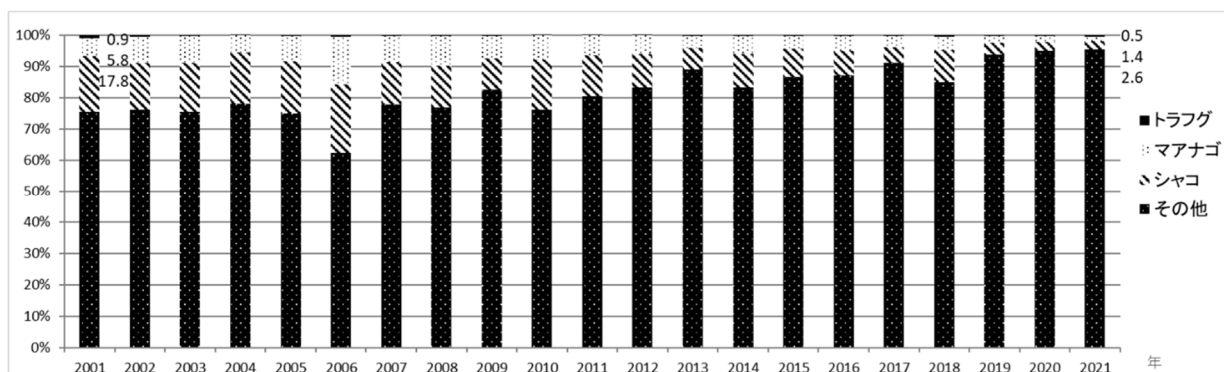


図2 伊勢湾・三河湾内の小型機船底びき網漁業全体（貝類除く）の漁獲量に対する構成魚種の推移

4 資源管理措置

対象漁業種類	目的	措置内容
小型機船底びき網漁業（愛知・三重）	小型魚の保護	【トラフグ】 全長 25cm 以下の放流 （三河湾：9 月 1 日～9 月 30 日） （伊勢湾：9 月 1 日～10 月 31 日） 【マアナゴ】 全長 25cm 以下の放流（10 月 1 日～11 月 30 日） 【シャコ】 資源量予測に基づき、冬期の一定期間中に、1 日 1 隻当たりの漁獲量を設定し、水揚げ制限（愛知県まめ板網（伊勢湾）） 【魚介類全般】 改良漁具の導入（愛知県まめ板網）網目拡大
	努力量制限	休漁日の設定（地区ごと）
あなご籠漁業（愛知・三重）	小型魚の保護	【マアナゴ】 全長 25cm 以下の放流（10 月 1 日～11 月 30 日） 改良漁具の導入（愛知県）網目拡大
機船船びき網漁業等（愛知・三重）	小型魚の保護	【マアナゴ】 稚魚（ノレソレ）目的の操業禁止
その他のほかの措置	種苗放流	【トラフグ】 愛知、三重、静岡の 3 県で実施
	漁場環境の保全	海底堆積物の除去、海底耕耘、干潟・藻場造成

5 関係者による連携を図るための体制

行政・研究担当者会議及び漁業者協議会により、資源管理の目的、期間等を明確にしつつ、資源状況や漁獲状況の把握、資源管理措置の確実な実施を図り、管理方策の改善を検討する。

（参考）伊勢湾・三河湾外（渥美外海等）で現在実施されている取組

- 小型機船底びき網漁業（通称：外海底びき網）

伊勢湾同様に、トラフグ小型魚の保護を継続して実施する。

（9 月 1 日から 10 月 31 日までの間、全長 25 センチ以下の放流）

- ふぐはえ縄漁業

漁具制限や漁獲努力量の削減などすでに実施されている資源管理措置を関係者の協議に基づき適宜見直し等を行いつつ継続する。

伊勢湾・三河湾小型機船底びき網漁業対象種資源の広域資源管理に基づく
令和５年度を取組状況について

１ 漁獲努力量の削減措置

項目	措置の内容
小型魚の水揚げ制限	(１) 全長 25 cm以下のトラフグ(小型機船底びき網漁業)、マアナゴ(小型機船底びき網漁業、あなご籠漁業)の放流。 (２) マアナゴ稚魚(ノレソレ)目的操業の禁止(機船船びき網漁業)
漁具の改良	小型機船底びき網漁業とあなご籠漁業の一部で目合いを拡大。
産卵親魚の保護	冬期におけるシャコの漁獲量制限を一部で継続実施。
休漁期間の設定	地域ごとに休漁日を設定。

２ 資源の積極的培養措置(トラフグ稚魚の放流)

愛知県	三重県	静岡県	合 計
18.0 万尾	21.7 万尾	3 万尾	42.7 万尾

※湾外放流実績も含む。

※平成１８年度から関係県の連携・協力による海域レベルでの適地種苗放流体制の構築に向けた取組を実施。

※静岡県(静岡県ふぐ漁組合連合会)の放流は、三重県伊勢市有滝にて３万尾放流。

３ その他(トラフグ保護の湾外の関連した取組)

- ・ 操業禁止期間の設定
- ・ 採捕制限等(ふぐはえ縄漁業)
- ・ 全長 25 cm以下のトラフグの放流(小型機船底びき網漁業)